

---

# フライ・フィッシャーズ

カカオ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

フライ・フィッシュヤーズ

### 【Nコード】

N4691Z

### 【作者名】

カカオ

### 【あらすじ】

その民宿は海辺にあつた。概観はお世辞にもきれいとは言えず、くたびれたそれだった。そこにはどういうわけかワケあり客が集まり、従業員もワケありで悩みを抱えていた。それぞれの悩みが渦を生み、風を起こし、やがては台風となる。そんな嵐の中を、彼らは空を泳ぐこいのぼりの如く飛ぶことができるのか。

民宿熊島を舞台にした群像劇が、今まさに幕を開ける。

## 201号室の掃除

右手に掃除機、左手に掃除機のホースを持ち、熊島新は二階へとくましまあらた続く階段を上っている。額から汗の粒が蕁麻疹みたいに大量発生し、拭っても拭っても生産され続ける。

「あちー」

新は独り言を呟いた。

今日は六月二十五日、土曜日。天気、晴れ。湿度、スーパー高え。とにかく蒸し暑いのだ。先週末までは梅雨らしく連日雨を投下していたお天道様も、やがてそれに飽きて今度は太陽光線による熱照射攻撃に切り替えた。

連日の雨による湿気と昨今の温暖化も手伝って、日本古来より代々受け継がれている蒸し暑さが、よりバージョンアップして今年も引き継がれてしまった。人間どもが暑さで苦しむ姿を、お天道様はさぞ愉快そうに眺めていることだろう。

二階廊下には到達。

左側に窓が真っさらなテストの答案みたいは何もない空を映し、右側には201、202、203号室のドアが三つ並ぶ。

新が一番近くの201号室のドアをノックする。

返事はない。ただのドアのようだ。

いやいや、奥には201号室のお客さんがいるはず。新は腕時計を見る。去年、砂浜の掃除の最中に拾ったその見るからに安物のデジタル式の腕時計は十時三分を示している。

この時間、彼女は朝ごはんを食べ終えてうだうだしている時間だ。たぶん、いる。

「滝川さんたきがわ」

お客さんの名を呼ぶ。返事はない。

そこで新は思い出す。201号室のお客さんがいつも口づるさく言っていたことを。

「はあ……」

新は嘆息し、そのカタカナ十五文字の名を呼ぶ。

「……クリステルさん」

新がそう呼ぶやいなや、ドアは待ってましたといわんばかりに開けられた。明らかにドアの前でスタンバっていたものと思われる。

「よー、青少年」

201号室のお客さん

たきがわはなし  
滝川花子は挨拶した。

実年齢は二十四歳とのことだが、実際の見た目は二十歳、いやそれより下にも見える。小動物めいた可愛らしさ、ぽわぽわふわふわした雰囲気を振りまいているが、はつきりとした物言いと遠慮と容赦と礼儀のない振る舞いで、見た目から窺えるキャラを崩壊させている。

「あの滝川さん、部屋の掃除を」

「あたしのはクリステルと呼びな」

滝川は間髪いれず訂正した。譲れないらしい。

「は、はあ………すみません。それであの………クリステルさん、部屋の掃除の時間なので、少しの間外に出ていて欲しいんですけど」

「あーはいはい」

滝川は面倒臭そうに返事をする、財布と携帯電話をジーンズのポケットに突っ込み腕時計を装備、さらに皮製の大きな手帳を無理やり尻ポケットにねじ込む。部屋の外に出る。

彼女は新とすれ違うとき「アンタも高校生なんだからもつと遊ばなよー」と声をかけ、階段を降りていった。

これはこれで楽しい仕事なんだけどなあ。

新はそう思いつつ、掃除機のコンセントを差込み、201号室を見渡す。隣の部屋の久野くのいちた一太から借りたらしきマンガ本が何冊かベツドの上に放られている。机の上には朝ごはんの食器類が盆に載せられている。本当は食器類の片付けはセルフサービスで、各自がダイニングの流しまで持って行かなくてはならないのだが、滝川はよく忘れて部屋に放置してしまう。

新は掃除機のスイッチを入れようとして、すぐに取りやめる。部屋に転がっているスーパーボールを片付けてからでない、掃除機が吸い込んで壊れてしまうかもしれない。滝川の部屋にはなぜかスーパーボールがいくつもころころと転がっている。赤、黄、緑、青、キラキラしたようなものまでカラフルに揃っている。その一個一個を拾って小さなかごにまとめて机の上において置く。たぶんまたすぐ散らかるだろうけど。

さて、と。

新は掃除機を起動させる。

この時間帯は『民宿熊島』の掃除の時間なのである。

私は異常なし異常なし。異常あり。

\*

やっちまった。滝川はまずそう思った。

あたかも誰かを殺してきたようなニュアンスが窺えるが、幸い滝川は殺人犯ではない。

彼女は砂浜に寝そべり、横を向いて愛車『赤い彗星号』（ふつーの自転車）を見やる。滝川と同じく寝そべるようにぶっ倒れている。さび付いて赤い部分がほとんど侵食され、酷い有様だった。まあ、さび付いたのはもつと前からだけど。『赤い彗星号』というのは、前に付き合っていた元カレがつけた名前だ。何かのアニメにちなんだ名らしく、三倍のスピードで走れるとかどうか。滝川はその元ネタはわからないし気にしてもいなかったが。

ゴールデンウィークが明けて二日目、休みでもなければ夏でもない、ましてや時刻は夕方四時半、砂浜に人はあまりいなかった。犬の散歩をしているおばさんが横になっている滝川のほうを奇異の目で見てくる。

黒のパンツスーツにヒールという出で立ちで砂浜に大の字になっているのだ。しかも頭から爪先まで既に砂まみれで、奇怪に思われなくても仕方がない。

「あーん」

突然発せられた滝川の咆哮に、おばさんはぎょっとして犬を引きずって逃げるように立ち去った。

「あっはっはーザマーみやがれっ。あっはっは……はっ……はー」  
滝川の笑いは溜息に変わっていく。「はー、どうするかなあ」

最初は乗り物酔いかと思った。

通勤電車の中で、滝川が体の不調を感じるようになったのは、大学を卒業し会社員生活が始まって一週間ほど経ったときだった。

疲れてるからなー、あたし。

働き者だからなー、あたし。

頑張ってるもんなー、あたし。

色々と言いつて試してみた。誤魔化してもみた。けれど自分に嘘をつけばつくほど、体の不調は酷くなっていった。

苦しい。心臓が、苦しい。

乗り物酔いなんかでないのは間違いなかった。もし乗り物酔いなら気持ち悪くなるはずで、心臓を鷲掴みにされて握り潰されているような苦しみや痛みを感じることもない。

けれど病院で診てもらっても、異常なしと言われた。

滝川はこの『異常なし』を信じることにした。

異常なし。

異常なし。

わたしは、異常なし。

もちろん、異常あり、だった。

滝川が住むアパートから会社までは電車を乗り継いで一時間かかる。最初の頃は苦しくても我慢して会社まで辿り着けた。

しかし徐々に苦しさは増していき、乗り換えの駅で休憩するようになった。会社までかかる時間は一時間十分になった。

乗り換えの駅まで我慢できなくて、途中の駅で降りるようになった。会社までかかる時間は一時間二十分になった。

降りて休憩する感覚が徐々に短くなった。ついには二駅に一度降りて息を整えなければ体がもたなくなった。会社までかかる時間は二時間となった。

そんなことを、滝川は一年以上続けた。

でも、とうとう限界がやって来た。

ゴールデンウィークが明けて二日後、滝川は電車に乗ることもで

きなくなつた。

苦しいとわかつててなんで乗るの？

コレに乗ってどこに運ばれちゃうの？

なんでわたしは運ばれちゃうの？

自分という存在が、長距離トラックに運ばれる荷物の一つにでもなつたかのように思えた。一人の命じゃなくて、一つの物。運ばれていく、一つの物。荷物。

滝川は逃げた。

電車に乗らずに駅を出て、駐輪場に停めてあつた赤い彗星号にまたがってペダルを必死にこいだ。とにかく駅から遠ざかりたかつた。半ばヤケクソ気味に。

なにかを求めるように。

近所の国道を道なりに突っ走り、大きな橋を渡り、また道なりに自転車走らせ、途中から有料道路になつて車しか通れなくなつたので回り道したら、荒涼とした工業団地に突入してびっくりした。ドンドンカンカン音を立てる無機質な工場と煙をもくもく噴き上げる煙突、ひび割れた墓石のような団地。

ここは世界の果て？

そんなことを思った。

そして滝川はその団地を抜け、さらに自転車をこいで海までやってきた。九時間以上かかつた。

脚はもう使い物にならないほど疲れていて、いつそ切断して海に放り込んでやりたい気持ちにかられたが、そうしたら足の爪にマニキュアを塗る楽しみがなくなると思つてやめておいた。

海まで自転車で来られたのは、前付き合つていた彼氏がよく運転していた道を覚えていたからだ。

ふと携帯の存在を思い出して、すぐ近くに転がっているバッグに腕を伸ばす。腕時計が日光を反射して眩しい。いかにも高級な腕時計らしい輝きに思えて、滝川は溜息をつく。どうしてこんなもん買っちゃつたんだよあたし。

携帯を確認すると、恐ろしい数の着信とメールを受信していた。会社の上司の福岡靖男ふくおかやすおやその他同僚の皆々様、母にまで連絡がいつているらしく『オカン』という名前まで着信履歴に名前を並べていた。さらに元カレの名前まであったのには本当に驚いた。

「なんてこつたい」

面倒なので、携帯の電源は切った。ついでに自分の電源も切るべく瞳を閉じた。

へい、ネーチャン

何者かの気配を感じて、滝川は目を開けた。

「うわー、砂と潮風で髪の毛がガビガビだ……ん？」

上から某子供店長ばかりにかわゆい少年が滝川を見下ろしていた。

小学校低学年だろうか。切りそろえられた前髪がかわゆすぎる。

「へい、ネーチャン。添い寝してあげよーかい？」

少年は言った。某子供店長とは雲泥の差である。

「少年、ナンパの仕方がなっていないぜ」

「えっ」

絶句する少年。相当自信があつたらしい。

十七秒ほど思索し、少年は何かを思いついたらしい。自信ありげにこう言った。

「へい、ネーチャン。おっぱい揉ませるや」

ぶっ叩いてやったの言うまでもない。大人としてしっかりと教育しとかねば。

やれやれ、と嘆息し、滝川は再びごろりと砂の上に横になった。

「ネーチャン、名前なんつうの？」

まだいたのか。

無視した。

「おれは久野一太っていうんだ」

訊いてない。

「あだ名はクノイチ」

だから誰もそんなこと訊いてない。

「小学五年、独身」

独身で。あたりめーだ。

「礼儀知らずだよネーチャン。名乗られたら自分も名乗らないといけないんだよ」

まっとうなことを言っているようだが人の胸を揉ませるだとかい

うヤツに礼儀知らずなどと言われたかない。

「ヘイ、ネーチャン」

いつの間にか少年は滝川の頭部の横に腰を下ろしていた。ハーフパンツから覗く脚は女の子かと思うほどに白くてすべすべしてそうだった。「ヘイ、ネーチャン。名前なんていうの？」

だーもーしつけーなー、と思いつつ、滝川は少し嬉しかった。話しかけてくれる人がいることに。一人でいると、本当に世界の果てに来てしまったようで恐かったからだ。

「あたしは滝川」

苗字まで言つて、ふとあの女の顔が頭に浮かんだ。きれいで華やかで、向こう側の世界の住民のあの女の顔が。

「……すてる」

「お？」

「クリステル……滝川クリステルなのだ」

滝川は言つた。ちなみに本名は滝川花子。

「おお、外人？ ハーフ？」

「琉球人とアイヌ人のハーフだよ」

母の出身は沖縄。父の出身は北海道。

「よくわかんないけどスゲー。クリスタル姉ちゃん」

「クリスタル違つつうの。あたしのはクリステルと呼びな」

失敬なナンパ少年　クノイチと不本意で嘘っぱちな自己紹介を交わした後も、滝川はクノイチと話しをした。会話していくにつれて、クノイチが近くの民宿に泊まっていることがわかった。

見たところ周囲にネットカフェやビジネスホテルなんか無さそうだったので、これ幸いと滝川はクノイチにその民宿まで案内をさせた。

クノイチについて行った先は歩いて二十分ちよつとのところにある『民宿熊島』だった。

とりあえず寢床確保、と。

滝川は小さく安堵の息を吐いた。

『民宿熊島』は海沿い、目の前が砂浜という津波が来たらまず一番最初に流されそうな場所にぽつんと建っている。

外観は遠くから見れば悪くはない。白を基調とした壁面に赤い屋根、正面入り口には広々としたウッドデッキがあり、客がくつろげるテーブル席も設けられている。

けれど接近して見ると、ボロい。

白い壁面は明らかに素人がペンキを塗ったであろうムラのある雑な仕事、赤い屋根は赤茶けて汚くなっている。ウッドデッキは所々が朽ちて耐久性に一抹の不安を感じさせる。

滝川はそんなこと気にもしなかったが。

屋根があつて床があつて、そして人がいる。

それだけで十分だったからだ。

信じられないことに、民宿にはクノイチがたった一人の客だった。滝川は最初ホームアローン状態のクノイチを不思議に思った。

クノイチは民宿の客ではあるが、あたかもこの住民のように生活していた。民宿で寝食をするのももちろん、学校もここから通っている。帰ってくる場所も民宿。

いったい家はどうしたんだろ？ ていうか宿賃は払えてんの？

滝川はある日、そんな疑問をクノイチにぶつけた。

「おれのお父さんとお母さん、仕事で忙しいから」

答えはそれだけだった。

あまり触れられたくないのだろう。滝川はそう判断し、それ以上何も訊かなかった。滝川にだって触れられたくないことの一つや二つある。それに民宿の人はクノイチを普通に扱っている。親公認なのだから問題はないのだろう。本人がどう思っているかはまた別だが。

民宿にはクノイチのほかにも、ここの主の熊島紀伊介くましまきいすけというおじい

さんと、その孫で高校生の熊島新がいた。この二人が民宿を切り盛りしているようだが、主に立ち働いているのは新だった。紀伊介はいつもぼんやりとウッドデッキのテーブル席に座り、海を眺めながら紫煙をくゆらせている。暢気な隠居生活だ。

会社からはやたらと電話がかかってきて、一度だけ出たら凄い怒鳴られた。上司の福岡だった。

滝川は「もう辞めるっちゃ」とふざけて言って電話を切った。それからしばらくは携帯の電源を切っていた。最近では電源をつけてはいるが、全ての着信とメールを無視している。

とりたてて目的があるわけでもない。お金は使う暇すらなかったからたくさんある。ひとまずの長い休暇だと思って、滝川はのんびりすることにした。

そして、周囲には自分をクリステルと呼べと強要した。

それでは、次のニュースをお伝えします

『民宿熊島』に宿泊して六日目、最初の日曜日、その日の夜。

滝川は泊まっている部屋　201号室でぼんやりとテレビを見ていた。画面はニュース番組を映していて、政治家の問題発言を問題にして肝心な問題は置いてきぼりにしていることを問題にしていた。この国は問題だらけである。

まあ、滝川はニュースを見ているのではなくて、彼女を見ているだけだったのだが。

『それでは、次のニュースをお伝えします』

滝川クリステルが、画面の向こうで言った。

DNA配列に日本とフランスの螺旋が混合しさらに美に特化させた結果のような顔つきに、きれいなのに力強い瞳。華やか過ぎて周囲の色がくすんで見えてしまう。周囲というか、主に自分が。

「同じ滝川なのに」

どうしてこうも違うんだろ。

テレビをぶん殴ってやろうかと思ったけど、目の前の14型ブラウン管テレビには責任はないことを思い出し、枕にバフツと拳をめぐり込ませたり、クノイチと駄菓子屋へ行ったときにハズレくじでもらったスーパールを思い切り壁に投げて我慢した。スーパールはばこばこ壁に跳ね返って最終的にはテレビに直撃したが。

もしあたしにフランスの血が混じっていたら、あたしもクリステルみたいになれたんかなあ。

滝川クリステル。

あたしは、滝川花子。うーん、納得いかねー。

「クリスタル姉ー、あーそーぼっ」

ドアの向こうからクノイチの声がした。　夜の十時過ぎだとい

うのに、まったく最近の小学生は。誰がドアを開けてやるものか。厳しくしつけないといけないね、うん。

「ガキはもう寝る時間だろーが。それと、あたしのはクリスマスと呼びな」

「モンハンやるうぜい」

滝川はすぐにドアを開けた。PSPを二台持ってニヒツと笑っているクノイチがいた。滝川もニカツと笑った。

その日は朝までモンハン大会だった。

なんかねえ、記憶喪失らしいよ

滝川が『民宿熊島』に泊まり始めて二週間ほど経ったころ、一人の女の客がやってきた。

滝川は自分の部屋の窓から、その女が民宿に入ってくるのを見ているところを見ていた。凜としたキャリアウーマン風の感じだったが、実際に話してみるとスローで上品なマダムといった佇まいだった。

とてもきれいな女で「妖艶」という単語を当てはめたくなるような雰囲気をもし出していた。見たところ三十過ぎぐらいか。なんだか滝川クリステルと似たようなオーラを感じないでもない。

上品、気品、品格。

それら上等な質感めいたものを体の表面にぺたぺた貼り付けて歩いているように見える。

あーそうそう。コレも忘れちゃいけない。

巨乳。

胸元が目立たない服装で誤魔化しているようだけど、誤魔化しきれしていない。まごうことなき巨乳ちゃんである。驚掴みにしようにも手からこぼれるに違いない。

彼女は滝川の部屋の隣の隣、203号室に泊まり、三日経っても四日経っても泊まり続けている。

いったいいつまで泊まるつもりなんだ？ いい大人が平日なのに休んで民宿に泊まるなんて何かワケありかも。警察から逃げるとか？

自分のことは棚にあげて好き勝手考える滝川だった。

そして彼女は五月の末日の夜、クノイチを偵察にやった。クノイチは十分ほどで戻ってきた。

「どうだった？」

「スゲーおっぱいだっつた」

「んなこと訊いてないよ」

「クリスタル姉ちゃんよりずっとおつきいおっぱいだった」

ぶっ叩いたのは言うまでもない。

「あだただ……なんかねえ、記憶喪失らしいよ」

「あ？」

「だからね、記憶喪失。自分の名前以外はゼーんぶ覚えてないんだって」

うそ臭いことこの上ないが、どうも本当らしい。名前だけは覚えていて春日井弥生かすがいやよいという。

ま、いいや。韓流ドラマじゃよくあるみたいだしな。うん。

滝川はすぐに春日井のことなどどうでもよくなった。とりあえず無害みたいだし、自分の休みを邪魔するふうでもない。春日井は一日のほとんどを民宿一階のリビングにあるソファに座って、お上品に読書をしているだけなのだ。

そう、春日井のことなんて気にするときではないのだ。

目下のところ『この休みがいつまで続くのか、いつまで続けるのか』というのが問題なのだった。滝川はその問題を先送りし続け、本日六月二十五日、土曜日の朝を迎えたのだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4691z/>

---

フライ・フィッシャーズ

2011年12月18日11時48分発行